

はじめに

私は新潟県新潟市の出身である。実家は被害がなかったが相当揺れたようである。私が新潟出身であることを知っている友人達は「実家は大丈夫？」と言った内容のメールを送ってよこした。私は実家に安否確認の電話も入れず、全くの他人事であった。しかし、翌日の朝刊で大分大きな地震であった事を知った。以後、報道を見ると、徐々に大事であると理解できた。「地元がピンチだ！これは助けに行かねば!」、と妙な地元愛が数日経って湧き上がり、ボランティア参加を決意した。

私は現在、大学で地理学を勉強している。地理学の一分野に地域計画論というものがある。災害地の復興も地域計画の一環であり、行政機関の成すべき事、民間機関の役割、そして、個々の人間が何をすべきかを、実際の被災地を目の前にして体験することにより、何か分かるのではないかと思った。ちなみに、地理学を専攻しているとはいえ、断層がどうのこうのと知識は僅かに有していても、現地の状況が分かるとも期待していなかった。むしろ、初体験となる災害ボランティアを通じて何かを見つけられたらと思い、被災地に向かった。

当初はこのレポートを作成するつもりでなかったため、いささか詳細度に欠ける事を最初に断っておくことにする。

I. 新潟県中越地震の概要

新潟県中越地震は、2004年10月23日(土)17時56分に新潟県のほぼ中央に位置する小千谷市を震源として発生したマグニチュード6.8の直下型の地震である。本震の後2時間以内に震度5以上の余震が10回以上も起こり、翌日以降、11月中旬になった今でも比較的大きな余震が続いている。

このため、救助作業、復旧作業が遅れている。この地震では上越新幹線の下り線長岡駅付近で新幹線が脱線した他、関越自動車道も通行不可能となった。この為、首都圏からの交通は滞った。また、一般道路も、各地で通行止めとなり、被災地域への出入りが不可能となった。

II. ボランティアの準備, ルートなど

交通手段：マイカー

参加人数：私を含めて二人

主な携行品：1日分くらいの食料, 2Lペットボトル(スポーツドリンク, お茶), ツナギ, 軍手, 長靴, 上着, 寝袋, デジカメ(フル充電)

基本的に現地調達はできないと想定して準備した。また、夜を車内で過ごす事も考慮した

内訳であった。

被災地までのルート

関越道練馬 IC→月夜野 IC→国道 17 号（三国街道）→苗場，湯沢，塩沢を経由し，国道 253 号で十日町市に入る。信濃川にかかる十日町橋を曲がればすぐ，川西町役場であったが，通行止めのため国道 403 号で川西町市街地に入った。この地域の道は主だった数箇所の県道で結ばれているのでそれらがことごとく通行止めとなり，思うように目的地へ着けなかった。

Ⅲ. 川西町でのボランティア参加 平成 16 年 10 月 28 日 木曜日

午前 9 時に川西町社会福祉協議会にてボランティア受付をし，川西町の体育館に行った。そこで，ゴミの分別作業を手伝った。作業時間は午前 9 時から午後 4 時までで，午前中一回と昼休みと午後一回の休憩があった。

途中，川西町役場に行ったが，そこには全国からの救援物資が山積みになっており，仕分けに追われていた。

ゴミは町内各地から分別されていない状態で集められてあった。その一部は，ある程度分別されていたが，もう一段階分別する作業を担当した。分別内容は，燃えるゴミ，プラスチック，トレイ(白色)，ペットボトル，本，粗大ゴミ，埋め立てゴミ（ガラス破片等）廃棄困難ゴミ（バッテリー，劇物等），家電であった。ゴミ収集車が来たときは，粗大ゴミや埋め立てゴミをぶち込む作業をした。



ゴミをゴミ収集所に出す段階で分別がされていればこのような作業は必要ないか軽減できると思った。被災者の方々はそんな場合ではなかったのだろうか。だが，普段からゴミの分別習慣を身につけていればまた違っていると思う。

途中の休憩や昼休みで，弁当やパン，おにぎり，飲料を配っていた。ボランティアにも配られた。それを目の当たりにして，どこか拍子抜けした。現地は物資が不足しているだろうと想定し，食糧と水は用意してきたのでなおさらである。

そういえば，周辺は地割れも倒壊家屋もない事に気付く。報道では悲惨な状況が主に伝えられるが，状況はそれだけではないと気付く。例えば，信濃川の堤防で車ごと生き埋めになって生還した少年が一番悲惨な現場の一つであろう。誰もが知っている。それ以外にも地震の被害は広範囲，大多数の人間に被害をもたらした。ここ川西町も被害を受けた。被害の程度は地割れも倒壊家屋もなく，ボランティアにも食糧を分けられるレベルである。「何だ，大した事無いではないか」しかし，ボランティアを必要とする程の被害を受けたわけで，丸一日作業しても一向に片付かなかった。この日に思ったことは「現地に行って

初めて分かることがある」の一言に尽きる。

この日の夜は日本海側の柏崎まで出て、北陸道柏崎 IC から乗り新潟市の実家に泊まった。

IV. 小千谷市でのボランティア参加 平成 16 年 10 月 29 日 金曜日

まず、小千谷市へは長岡から国道 17 号で南下し、越路町を通過して入る。実質的にこのルートしかないくらい、小千谷市は孤立していた。

小千谷市総合体育館脇に設置されたボランティアセンターは川西町の規模ではなかった。市内各地から、ボランティア派遣の要請が FAX で送られてきており、要請された内容（人員、仕事内容、交通手段、資格等）に合わせて、ボランティアの個人の能力を発揮できる作業地に派遣するシステムであった。バイク所有者はその機動性を活かした仕事、医療系の資格を持っていれば医療に従事できるといった具合である。病院単位で複数人で行って来たチームもあった。また、川崎市水道局と書かれた車両をはじめ、遠方の自治体からの応援も見られた。



体育館には多くの人が避難生活をしている。敷地内の一角にテント生活をしている人もいた。駐車場には自衛隊車両も多く、仮設のトイレや風呂に長蛇の列ができていた。何かの説明会も開かれていた。また、体育館の館内放送で、「換気の時間になりました。窓付近の方は窓を開けて下さい」との指示があった。避難所の生活は細部に至るまでの協力が必要だと思った。

私たちは地区センターの「水汲み」という内容で作業時間 10 時～16 時の間、派遣された。地区センターと言うより、公民館といった方が当てはまるだろうか。30 人程が非難していた。主に高齢者で、各家庭で余震の危険回避や清掃作業の邪魔にならないようにそこにいるのである。



早速作業を開始しようとしたら、「水汲みはさっきやってしまった」との事。話が違う。FAX でリアルタイムに需要と供給のバランスが取られていると思ったがそうでもないようだ。

そもそも「水汲み」とはトイレで用を足した後で手を洗うための水を給水車で補充することである。派遣された地区では一週間経ったにも関わらず、断水状態であった。

何をしていたか分からずにいたが、11 時くらいになると、配給車が来た。「お昼の炊き出しをやるからその手伝いをして」とのこと。3 日分のとん汁の食材を昼と夜、一回につき 2 鍋にあらかじめ分けて保存しておくわけだが、その等分作業をした。野菜を切ったり、

皮を剥いたりするのは、私は苦手であったので遠慮した。

勿論断水であったため、調理の際の手洗いすらできない。十分にウェットティッシュで手を拭いから食材をいじる。衛生的とは言いがたい。先述したように、トイレの手洗いもバケツ汲んである水を用いる。総じて不衛生である。窮屈な避難所暮らしや余震に怯えて生活していると精神的にも弱り、体調を崩す方も多い。水洗トイレや水がいかに重要なものか、なくなって初めて分かる。これも今回被災地に行ってみて分かったことだ。

とん汁ができあがると配りに行った。私は軽トラの荷台に鍋ごと乗った。勿論違法行為であるが、お構いなし、緊急避難といったところか。実際警察はこのようなことをいちいち取り締まっているほど余裕は無いだろうと想像した。

配給場所はお寺前の広場だったが、既に長蛇の列ができ、今か今かと待ちくたびれた様子であった。1家庭1鍋で50人近く並んでいた。とん汁は1鍋おたま2杯で救援物資のパンは4人分を目安に配った。とん汁はピッタリなくなったが、パンは大量に余ってしまった。次回に回すのだろうが、次回も明確な分量の基準があるわけではない。この地域には何人くらいの人が生活しているからこの地域への分量はこの程度かという想像と、実際に受け取りに来る人が来るか来ないかはわからないので、どうしようもないことなのか。余ったパンはもったいないが、廃棄される。

また、パンはコンビニで売っているパンである。救援物資として大量に提供されたようである。しかし、それが現地の人々に適切に行き渡るかというところでもない。余ったり、不足するなど当然である。一見しっかりしたシステムが構築されていそうな自治体であっても、規模が大きいなどの理由からか、末端は粗雑である。

小千谷市から東京に向かうには通常なら関越道小千谷ICから乗れば簡単だが、関越道上りは長岡～塩沢石打IC間が通行止めとなっていた。その他の県道も通行止めが多く、結局、長岡市まで戻り、国道8号で柏崎まで行き、そこから昨日と同じ道を通り、松代、川西、十日町、塩沢と2時間以上かけてようやく関越道に乗り東京に帰った。

小千谷市の被災状況



石でできた垣や墓はことごとく倒壊していた。修復しようにも余震が続いており危険なため、作業ができない。



大型ショッピングセンターの駐車場にゴミが山積みになっていた。売り場が大きいとゴミも多くなり、撤去・清掃作業は時間がかかる。営業は勿論していない。



テント生活をしている様子が伺える。



道路は上の写真のように地割れが多かった。通行止めまで至らないもののとても運転しにくかった。歩道のタイルも破損している。点字ブロックは無事だが、歩きにくい部分もある。



マンホール付近が最も交通の障害になる。地震の影響でどう力が加わったか分からないがマンホールを中心に飛び出る。写真はそれほどでもないが、ひどい物になるとキノコのようにになっている。ポールが設置され、車がよけられるようになっている。しかし、市内の道路や各地を結ぶ県道は片側1車線づつがほとんどであり、通行止めにはならないまでもこれらをよけようとして、交互通行になり、渋滞する。被災地への交通、流通の妨げの一つになっている。



営業を停止している JR 小千谷駅.



倒壊家屋.





地震の影響が崩落している。木々が土ごと滑り落ちてきたようである。

感想

ボランティアで本当に被災者の役に立ったかは分からない。広範囲に渡る被災地、何万人という被災者を前に私たちの力など微々たるものだ。

しかし、得るものは大きい二日間だったことは確かである。メディアを通じて分かる部分とそうでない部分がある。現地に行ってはじめてわかる部分の方がずっと大きい。道路の通行のしにくさを自分の車で体験した。被災者の方々と接した。配給食を作った。自分が被災者になったとき、今回の体験があるのとないのでは大きく違うと思う。

日本は全国各地に震源があり、地震の脅威からは逃れられない。災害は地震ばかりではない。台風や集中豪雨による水害は記憶に新しい。極端な話、日本は国を挙げて、防災意識を高める必要があるとも思う。しかし、普段の生活の中では非日常の事であり、いつおこるとも分からない災害に対しての意識を高め続けることはどうしても後回しになってしまう。現状ではせいぜい、定期的な避難訓練程度であろう。

それだけではだめだと思った。普段からゴミの分別を励行することや、防災知識を有していることは現代の煩雑な社会生活においても可能ではないかと感じた。実際、被災地でゴミの分別作業をした時、これは普段と変わらない作業であると感じたわけである。日常の中にも非日常は存在する。

被災地の一日も早い復興を願ってやまない。